

心でつながり、未来に広がる 蒲生と韓国の交流

日本一大楠どんと秋まつり実行委員会実行委員長 田中 久嗣

～ クレアより ～

地域の国際化を進めていくためには、行政ばかりでなくさまざまな主体が交流を進めていくことが重要です。高円宮記念日韓交流基金では、日韓の民間交流の優れた取り組みを顕彰しています。これらは、地域における民間交流を進めるために大いに参考となるものです。今回は、第3回受賞団体のうち、鹿児島県始良市蒲生町の「日本一大楠どんと秋まつり」における取り組みをご紹介します。

地元のシンボルである日本一の大楠にちなんで開催される秋まつりに韓国の学生を招きホームステイを行うことから発展し、日本から韓国への小学生の派遣を行うなど地域ぐるみの草の根交流が行われています。

1 交流のはじまり

1987年夏、日本語・日本文学を学ぶ学生たちが、ホームステイを通じて日本と交流するコグマ交流で一人の青年、張承勳さんが鹿児島県蒲生町に滞在しました。

韓国の太鼓「チャンゴ」の演奏者でもある張さんは、和太鼓に大変興味を持ち、「ソウルで共演してみたい」との一声が、蒲生の太鼓集団「蒲生郷太鼓坊主」の心を強く動かしました。そして、韓国で太鼓の共演をする夢を「コグマロード計画」と名付け具体的に動き出すことになりました。

2 太鼓集団「蒲生郷太鼓坊主」の挑戦

1988年、蒲生郷太鼓坊主のメンバーが、韓国公演の可能性を探るため訪韓。

当初、韓国側の反応は鈍いものでしたが、韓国中央大学副教授や韓国新聞編集人協会の事務局長、また在韓国日本大使館の方々から、「このような形の民間交流は初めて。協力するので是非実現を！」と勇気づけら



1988年 コグマロード韓国民俗村

れ、その実現への思いは一層強くなりました。

同年7月、メンバーは再度韓国を訪れ、この交流の協力者となる中央大学校の黄教授を紹介され、また、日本国大使館からも全面支援を得ることになりました。

その後、各方面からの支援により「第1回蒲生郷太鼓坊主・コグマロード」の開催に至り、ソウル市近郊の韓国民俗村で太鼓演奏の夢を実現いたしました。

このとき、黄教授は、「1945年8月以来最初の民間レベルの文芸分野における日韓交流である」と述べられています。

3 日本一大楠どんと秋まつりの交流

1994年、旧蒲生町において第1回「日本一大楠どんと秋まつり」を開催（毎年11月第3日曜日）。

このとき、初めて韓国から中央大学校音楽大学国楽管弦楽団を招きましたが、交流の最大の理解者である中央大学前総長・朴範薫氏も来日し、これをきっかけに、毎年韓国の伝統芸術を蒲生八幡神社境内にある日本一



2011年 どんとまつり

の巨樹「蒲生の大楠」の前で披露していただくことになりました。

また、これと併せて公演だけでなく蒲生町内でホームステイを行い、以来500人を超える大学生や高校生が町民との交流を深めています。

4 直流から交流へ

どんと秋まつりに韓国伝統芸能を紹介し始めて3年目、蒲生郷太鼓坊主顧問の小山田豊秋さんの「来てもらうだけでは交流ではない。直流だ。交流にするためには蒲生からも行かんといかん！」という一声を発端に、蒲生子どもたちをソウルに送ろうという動きが起こりました。

そして、これまで交流を支えてきた有志により、ふれあう旅「韓国」実行委員会を発足し、1997年に第1回ふれあう旅「韓国」を行い、その後、実行委員会から蒲生町国際交流協会へと発展し、事業の継承をして毎年交流を続けてきています。

ふれあう旅「韓国」は、国立伝統芸術高等学校（前ソウル国楽芸術高等学校）との交流で、夏に蒲生子どもたちがソウルへ、秋にソウルの学生たちが蒲生へ来る相互交流プログラムです。毎年、8月には、蒲生から交流大使として20人ほどの子どもたちがソウルの一般家庭にホームステイをすることで生活や食文化を体験し、伝統芸能に直接触れています。

また、この交流で韓国の伝統打楽器を学んだ子どもたちを中心に、韓国の伝統打楽器演奏グループ「サムルノリ蒲生郷」が誕生し、どんと秋まつり等で披露するなど年々交流が深化してきています。

5 想いの共有

全国各地で韓国と交流を行っていますが、教科書問題、竹島問題など両国の政治的な問題が起こったときに交流の中止が相次ぐ中、蒲生と韓国の交流では「こんなときだからこそ交流が必要！」と、草の根交流として発展し根付いてきました。

6 交流のシンボル

そして、交流のシンボルとして、1996年には黄教授から、2006年には朴総長から韓国桜が寄贈さ

れ、今では春にきれいな花を咲かせています。

7 次なる世代へ

このように、日本と韓国の太鼓の音色が響き合い始まった私たちの交流ですが、最後にこの町に生まれ育った高校生の作文を紹介します。

（鹿児島県立国分高校3年 酒匂莉華子さんの作文から）

私は小学3年生のとき、初めて交流に参加し、男子学生2人の受け入れをしました。初対面のあいさつは韓国語だと決意、しかし毎日練習した韓国語が、全く通じないという苦い経験をしました。でも母は韓国のおばさんのような勢いで、しかも鹿児島弁でコミュニケーションをする姿をみて、家族も韓国の学生も度肝を抜かれました。私は「なるほど、勢いも一種のコミュニケーションなんだ！」と感心したことを覚えています。でも小学3年生の私には母のようにできなくて韓国語を習い始めました。

11月のどんと秋まつりで、蒲生や韓国を大切に思うたくさんの先輩たちが、全力で取り組んでいる姿を目の当たりにしてきました。やらされる立場で大変な思いもしましたが、いつしかそれが楽しみとなり、今では、その人たちの姿がかっこよく見え、尊敬とあこがれの対象となりました。

それが私を夢に導いてくれました。

1. どんと秋まつりのお互い切磋琢磨する舞台にたち続け、蒲生にしかない心温まる舞台を守り続ける。
2. 蒲生と韓国をつなぐ架け橋になる。
3. 蒲生の良さと、韓国を生かしながら文化が共存する方法を考える。

後輩たちにもこういう体験を通して、故郷を大切に思ってもらいたいです。

みなさんも、ぜひ蒲生に来て韓国を楽しんでください。どんと秋まつりも見ると価値十分です。

これから私はしばらくの間、夢を実現させるために蒲生を後にしますが、多くのことを勉強して蒲生に役立つ人材になって帰ってきます。

次は私が蒲生の魅力を多くの人たちに伝えていけるように。